

うちの指揮官がケツコンしてくれない件

ごーやちゃんぷる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アズールレーンの最前線基地であるマドラス基地。

ここでは今まさに、指揮官と艦船少女達の命運を分かち、重大な会議が開かれようとしていた。

pixivでも投稿しています。

7話 6話 5話 4話 3話 2話 1話

7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話

38 30 24 19 13 7 1

目次

1話

人類は地表の7割が水で覆われた水の惑星で、文明を発展させてきた。しかし、そんな人類の繁栄は、突如海より出現した異形の敵《セイレーン》より一変した。

セイレーンの圧倒的な力に対抗する為、人類は過去のいざこざを水に流し、『ユニオン』『ロイヤル』『鉄血』『重桜』の4大国家を中心とした軍事連合《アズールレーン》を創設。人類のあらゆる英知を国境を越えて結集させたアズールレーンの活躍により、セイレーンの攻勢を食い止めることに成功する。

そうした中、人類の総力を持ってしてもセイレーンを完全に撃退できずにいる現状に対して、各陣営間で理念の違いが表面化していく。

そして『鉄血』と『重桜』がアズールレーンから脱退し、4大国家は2つの理念と共に分裂した。

人類の力のみでセイレーンを倒すべきであるとする『ロイヤル』と『ユニオン』で構成される《アズールレーン》。

セイレーンの力を利用することで世界革新を目指す『鉄血』と『重桜』で構成される《レッドアクシズ》。

人類はセイレーンに対抗するために、未だ多くの謎を秘める『メンタルキューブ』で構成される『リウウコツ』から『艦船少女』を生み出した。各地の基地に艦船少女と軍事基地を整備し、セイレーンを打倒する為に日々海域へ出撃している。

海に面して基地と諸々の施設が立ち並び、潮風の匂いがほのかに香るここは、アズールレーンの最前線である、マドラス基地。

この基地では多くの艦船少女達と、彼女達を指揮し基地全体を統括する役目を担う指揮官が生活しており、さらに奥地の海域を攻略する為、また、セイレーンを打倒する為に艦船少女達と指揮官が切磋琢磨している。

マドラス基地では1日の業務が終了し、日が暮れようとしていた。執務室で書類を片付けて整理していた指揮官は、指揮官業務をサポートしてくれた秘書艦に労いの言葉をかける。

「ベルファスト、今日の仕事はこれで終わりだ。ご苦労だった」

「はい、ご主人様。本日もお疲れ様でした」

秘書艦の席に座っているのは、ロイヤルの巡洋艦でありこの艦隊のメイド長を名乗るベルファスト。彼女は今週の秘書艦であり、たった今その業務が終了した。戦闘のみならず、秘書艦業務や艦隊の生活全般のあれこれなど、全ての作業を文字通り「完璧」にこなしてくれる彼女だからこそ、今日の仕事は普段よりも早く終わった。

「いつも助かる。メイド長の仕事もあるにも関わらず、こんなに仕事が目まぐるしく進むのは君のおかげだ。ありがとう」

指揮官からの感謝の言葉を受けて、ベルファストは「なんてことない」といった様子で微笑む。

「主に使えるのはメイドの務めです。ご主人様より感謝の言葉を頂き、光栄です」

そんな彼女の顔はどこか誇らしげで、指揮官を見つめるその瞳には明らかに好意が見て取れる。

「さて、来週からの秘書艦は...」

「明日からはヘレナ様、その次は高雄様でございます」

「そうか。きっと君のことだから、引き継ぎも滞りなく済むようになっているのだろう」

指揮官は椅子から立ち上がり、部屋の施錠をするために扉の方へ歩いていく。ベルファストも続いて立ち上がり、指揮官の背後にぴたりついて歩く。

「執務室を閉める。先に出てくれ」

「畏まりました」

指揮官はベルファストがそう言ってスツと横を通り過ぎ、部屋から出たのを確認してから執務室の扉を施錠した。

「では、私は私室に戻るよ。君のこの後の予定は？」

「この後は姉と明日の朝食の準備をする予定です。陛下が開かれるお

茶会へ出すスコーンの準備もあるので、就寝は少し遅れるかと思いません」

「そうか。体調を崩さない程度にしてくれ」

「うふふ、それはご主人様と同じです。一昨日は、寝落ちてしまったご主人様にベルファストの膝枕を堪能していただいたばかりでございますよ?」

指揮官は恥ずかしいのか、僅かに俯く。だが、そのままだとベルファストに一本取られたようできまりが悪いと思ったのか、少し開き直ったような態度をとる。

「そんなこともあったかな……」

機会があればまた頼む」

しかし、彼女は完璧で瀟洒なメイドであるベルファスト。受け答え方…… 言い換えれば、からかい方を心得ていた。

「はい。いつでも、心ゆくまでお楽しみくださいませ」

「敵わないなこりゃ……」という指揮官の言葉は、外に出ることはなかった。ベルファストは指揮官に仕えて見守ることが好きであったが、それと同じかそれ以上に、彼の困った様子を見るのが好きだった。

ベルファストは執務室の前で指揮官と別れた後、基地の施設である大講堂へと向かっていた。先程の指揮官との会話で気分が良いのか、それとも急ぎの用事があるのか、少し足踏みが早い。それは、彼女が自身の主を欺いてしまったことに心を痛めているからなのか、はたまた別に理由があるのか。

(ご主人様、申し訳ございません…… どうかお許しくださいませ)

いつもよりも早く業務を終えた筈のベルファストは、何故急いでいるのか。朝食の準備とスコーンの調理をする筈なのに、何故大講堂へと向かっているのか。いつもなら指揮官が業務を終えた後に紅茶を出すくらいには余裕があるのに、何故今日はそれをしないのか。それは、彼女がこれから向かう先で、このマドラス基地の…… 艦船少女達の今後の命運を分かつてであろう、重大な会議が行われようとしている

るからであった。

大講堂は熟練の艦船少女達が出撃によって得た経験や知識を、成熟途中の艦船少女達が学んで吸収する為の施設である。『学園』と呼ばれる施設群の中では上記の役目の他にも、その広さ故に会議を行われる場所としても機能している。基地全体が水平線に沈む夕陽の光を浴びる頃、そんな大講堂には用は無い筈の「熟練の艦船少女達」が集まっていた。

「失礼いたします。ベルファストでございます。秘書艦業務が終了したので参りました」

大講堂に到着したベルファストは大きな扉を3回ノックし、扉を開ける。すると、会議室となった大講堂に既に集まっていた艦船少女達がベルファストの方に目を向ける。それは、会議の開始の合図であった。

「機材の準備は完了しているし、メンツも集まったようだから始めるぞ」

円く囲まれた、さながら円卓のような席から、黒い軍服を着流して銀髪の長髪に白い軍帽を被った艦船少女が立ち上がる。

「あまり御託を並べるのは好きではないが……今日の会議に貴女達が集まってくれたことに感謝する。ユニオン代表のエンタープライズだ。よろしく頼む」

彼女はユニオンのヨークタウン型航空母艦、エンタープライズ。この艦隊の中でも最高峰の練度を誇り、その圧倒的な航空攻撃で敵陣を火の海に沈めてきた。今回の会議で進行を務める彼女が招集をかけて集まったメンバーとは。

「では、まず初めに本会議を中継で見ているであろう『対象』となっている艦を、それぞれの陣営から確認も兼ねて報告してもらおう。まずはロイヤルから」

円卓に集まった艦船少女は、この基地における4大陣営の艦隊をそ

れぞれ先導する文字通りの強者達。彼女達が醸し出す雰囲気は、さながら首脳会議である。そして、各陣営の代表が口を開く。

「ロイヤル代表、クイーン・エリザベスとフッドよ！ ベルは会議進行の補佐としてここにいて頂戴。ロイヤルの対象艦はフッドから説明させるわ」

彼女こそ、ロイヤル王家の女王であり政務もこなすロイヤルの中心人物、クイーン・エリザベスである。彼女の横に座るのは同じくロイヤルの巡洋戦艦であるフッド。ロイヤル所属の艦船少女の対象艦は彼女が説明するようだ。

「それでは、私から紹介させていただきます。ロイヤル所属の対象艦は………」

フッドはつらつらと艦船少女達の名前を挙げていく。

「……… 以上がロイヤルからですわ」

「一番多いだけはあるな……… 次はユニオンだ」

「よし、じゃあ私……… じゃなくて、ユニオン代表のクリーブランドから紹介するぞ」

ユニオン代表は、長い金髪とサイドテールが特徴的な軽巡洋艦のクリーブランド。戦闘ではオールラウンドな実力を発揮し、どんな場面でも平均以上の戦闘能力を発揮する。

「……… 以上、ユニオンからだ」

エンタープライズはそこそこいるな……… と呟いて次の陣営の紹介を促す。

「次は重桜から頼む」

「重桜代表、赤城と加賀ですわ。本日はよろしくお願いしますわ」

重桜代表は一航戦の赤城と加賀。他の艦船少女とは異なり、狐のような耳と尻尾がそれぞれの身体から生えている。これは、セイレーンの力を身体そのものに取り込んだ結果である。重桜の艦船少女には身体のどこかしらに動物のような耳や尻尾などを生やした艦が多い。

「……… 以上ですわ」

「最後は鉄血だな」

「鉄血代表、グラーフ・ツエツペリンとプリンツ・オイゲンだ」

鉄血の代表は、椅子に腰掛けて足を組んでいた銀髪赤眼の空母、グラーフ・ツエツペリン。自身の耐久性もさることながら、鉄血陣営の艦船少女の受けるダメージを軽減させることもできる、鉄血における守護の要。一方、プリンツ・オイゲンは前衛の守護の要である。グラーフ・ツエツペリン同様高い耐久性を誇り、極め付けはシールド展開能力を持つ。この能力を持つ艦船少女は限られており、敵艦隊に撃破されることは滅多に無い。

「……以上、鉄血からだ」

「紹介感謝する。今名前が挙げられた者達は、この会議の中継をそれぞれ自室で見ているだろう。では、当艦隊内で好感度が『愛』に達した艦の確認が終わったところで、本題に入ろうと思う」

そう。ここにいる艦船少女は、指揮官への好感度数が『愛』である者だけである。無論、先程各陣営毎に紹介された艦船少女達も皆、同様の条件を満たしている。

「貴女達は既に承知だろうが、この会議で議論するのは……」

このマドラス基地はアズールレーンの最前線であり、数ある艦隊の中でも指折りの戦力を保持している。そんな艦隊における熟練の艦船少女達が一堂に会する理由とは……

『何故私達の指揮官は誰ともケツコンしないのか』だ」

2 話

艦船少女達の戦闘能力の目安は主に『レベル』という数値で表されるが、レベルとは異なり『好感度』と呼ばれるものがある。好感度はその艦船少女と指揮官の親密度を表しており、最も低いのが「失望」、例外を除き最も高いのが「愛」である。

上記のレベルは艦船少女の基本的な戦力を表すものだが、好感度が上がると艦船少女の戦闘能力が向上することが確認されている。つまり、彼女達は指揮官との絆を深めることで、より実力を発揮することができるとのようだ。それ故に、指揮官は艦船少女の指揮だけでなく、彼女達のメンタルケアの役割も担っている。

そして、艦船少女とさらに強い絆で結ばれることができるのが『ケツコン』である。好感度が「愛」に達した艦船少女に『誓いの指輪』を渡すことで、指揮官は艦船少女とケツコンすることができるとの理由はお察しである。……「結婚」ではなく『ケツコン』と表記されている理由は、より戦闘能力を発揮できるようになる。

『誓いの指輪』は本部から支給される他に、明石という重桜の工作艦が経営している学園内の施設『ショップ』でも購入することが可能であり、購入数や所持数は特に限度が決められていない。つまり、最愛の者に操を立てるのも、皆に広く愛を振りまくのも指揮官次第ということである。

……しかし、このマドラス基地の指揮官は、ケツコン可能な艦が何隻も所属しているにも関わらず、誰ともケツコンしていないのである。

本来は艦隊の中で最初の1隻の好感度が「愛」に達すると本部から『誓いの指輪』が支給されるのだが、この指揮官に関しては支給されたのかされていないのかも定かではない。

今回艦船少女達の間でこのような会議が開かれたのは、偏に「指揮官が誰ともケツコンしない理由を明らかにして指輪を貰う為」である。

「まず、現在も継続している『当艦隊指揮官における指輪の所持の有無について調査』の報告を重桜から頼む」

エンタープライズの声を聞いて、加賀が書類を手取る。

「私から報告する。先月から重桜の忍に調査を行わせているが、簡潔に言って成果は出ていない。執務室にはどこにも指輪は無いことはこれまでの調査で明らかになっているが、唯一、指揮官の私室に関しては調査が不十分なので可能性アリ。今後は自分達の良心と戦いながら調査を継続することだ」

『良心と戦う』というフレーズに一同が心の中で首を傾げたが、会議は何事も無かったかのように進行する。

「報告感謝する。今後も調査の進展に期待しているぞ」

「エンタープライズさん。私から一つよろしいでしょうか」

エンタープライズが会議の進行を取り持つ中、フッドが手を挙げる。

「フッド、貴女は指輪の所在について何か知っているのか？」

「いえ。指輪については私も存じ上げません。指揮官様についてですわ」

開始早々、フッドが会議の流れを大幅に進めようとしていた。他の面々はフッドの発言に注意深く耳を傾けている。

「以前ロイヤルのお茶会の中で、指揮官様がケツコンなさらないことに絡めて、指揮官様の女性の好みについて話したことがありましたの」

「続けてくれ」

「この艦隊にはここにいらっしゃる皆さんを含めて、個性溢れる魅力的な女性が多いと思いますわ。一般的な殿方であれば、私達の誰一人も好みに合わない、ということは無いかと。ですが、指揮官様はどなたにも指輪を渡さない……」

「つまり、アナタは何が言いたいわけ？」

フッドの言い回しが多少回りくどいと感じたのか、プリンツ・オイゲンが彼女を急かした。

「あくまで可能性の話ですが、指揮官様は幼い少女に好意を寄せてい

るのではないかと思えますの」

瞬間、会議室がざわつく。本来の彼女達であれば「まさかそんなこととは」とただの冗談になっていたが、実際問題として指揮官が麗しい女性達に対して鼻の下を伸ばさないことは事実であった。

「これまで何人も艦船少女達が

「私のことをこんなに理解できる人はあなた以外にいない」

「指揮官との時間を独占することを、他の子に譲る気は無い」

「24時間あなたの身の回りの世話をする」

「私を連れて行ってほしい」

「私の恋心をあげる」

「なんでも受け入れる」

「婿として迎える」

など「軟着陸」が挑発レベルに思える程の猛アタックを仕掛けてきたが、その全てを流され、あえなく撃沈。女性としての自身を失いかけた艦もいるとか。

とにかく、指揮官の女性への好意の無さは異常であり、最悪の場合、指揮官が同性愛者であってもおかしくないのだ。それ程までに、このマドラス基地の艦船少女達は色々な意味で窮地に立たされていた。

「フッド。確かに貴女の言うような可能性はあるだろう。しかし、もし本当にそうなら、指揮官はとっくに駆逐艦の誰かに指輪を渡しているのではないだろうか」

会議の冒頭で確認した対象艦の中には駆逐艦もいたので、エンタープライズがフッドに言ったことは間違いではない。だが、今の彼女達はどんな可能性も考慮する必要がある程真剣だった。

「周りの目を気にしているだけの可能性もあるかと。何隻もいる中で駆逐艦とケツコンしたらどう思われるか……. などと考えているかもしれませんよ?」

フッドの言うことにも一理ある。それを否定する材料が無いので、会議に参加している者、中継を見ている者達の中で不安や期待が渦巻く。そんな中、暫しの静寂を破るように提案をしたのはユニオン代表、クリーブランドだった。

「指揮官がその…… ロリコンかどうかを確かめるなら、一つ提案があるんだけど……」

それはある者の不安を払い、ある者の期待を打ち砕くような提案だったが、会議が開始早々煮詰まってしまふよりはマシだと思ったエンタープライズは、クリーブランドの発言を促す。

「クリーブランド、聞かせてくれ」

「思ったんだけど、指揮官がロリコン…… かどうか分からないなら、本物に聞けば良いのかなあ…… って」

クリーブランドが言った「本物」という言葉の意味を計り兼ねる者や「ああ、成る程」という者が入り混じる中、おそらくその「本物」がいるであろう陣営の代表がクリーブランドの考えを理解した。

「つまりアーク・ロイヤルに、あの庶民がロリコンかどうか判断させればいい、って話ね！ 良いと思うわ！」

「成る程。餅は餅屋、ということか」

「餅……？ が何かは分からないけれど、私から重要参考人として、アーク・ロイヤルの召集を申請するわ」

クイーン・エリザベスはエンタープライズが使ったことわざの意味が分からなかったようだが、クリーブランドの考えを汲み取って賛同した。

「ロイヤルからアーク・ロイヤルの召集が申請されたが、他の陣営の面々は構わないだろうか」

「グレイゴーストから重桜のことわざが出たのは意外でしたけど、私は賛成しますわ。まあ、指揮官様がロリコンなどということは断じて無いと思いますけど。フフフフ……」

そう言った赤城の目には僅かばかりの炎が揺れて見えたが、クリーブランドとクイーン・エリザベスの提案に異を唱える者はいなかった。

「決まりだな。アーク・ロイヤルの召集を許可する」

クイーン・エリザベスはエンタープライズが許可するや否や、中継カメラにビシッと指を指した。

「アーク・ロイヤル！ 女王命令よ！ 今すぐここに」バンツ！

クイーン・エリザベスが威勢よくアーク・ロイヤルを呼んだ瞬間、大講堂の扉がクイーン・エリザベスの号令よりも勢い良く開かれた。

突然のことに会議室の面々は驚き、中には艤装を展開している者もいたが、扉を開けた張本人の姿を見て胸を撫で下ろした。

「陛下。このアーク・ロイヤル、召集に応じ馳せ参じたぞ」

クイーン・エリザベスは数秒程ワナワナと震えていたが、アーク・ロイヤルの方へ向き直って怒りを露わにした。

「ちよつと、アーク・ロイヤル！ 私の『女王号令』が台無しじゃない！ 空気を読みなさいよ!!」

「陛下。どうか気を落とさないでください」

今はむしろ早く来てもらったほうがよっぽど空気を読んでいる、と大半の者が思ったが、フツドに慰められているクイーン・エリザベスに悪いと思つたのか、心の中に留めておくことにした。

「それにしても早い登場だったな、ロイヤルの変態空母。ロリコンと聞いて、居ても立っても居られなくなったか？」

「ロリコン疑惑の話が上がった時、私が呼ばれると思つてあらかじめこちらの方に歩いて来ていたんだ」

アーク・ロイヤルの単純な登場の早さが気になった加賀から暴言が飛び出したが、その暴言を浴びせられた当人は意に介さない様子だ。

「ま、まあ、会議の円滑な進行への協力を感謝する」

エンタープライズは涙目になっているクイーン・エリザベスを余所にして会議を進める。

「さて、アーク・ロイヤル。貴女の日から見て、指揮官には幼女趣味の気があるのだろうか」

全員の視線がアーク・ロイヤルに集まる。

「無いな。閣下は私のようなロリコンではない」

即答。彼女は断言した。言っている人物が人物なので、その説得力には凄まじいものがある。

「物凄い説得力だが、一応根拠になるようなものがあれば教えてくれないだろうか」

「分かった。そうだな…… あれは駆逐艦の妹達が風呂…… ではない

くて……」

エンタープライズに促されたアーク・ロイヤルは、自身の駆逐艦に関する桃色の記憶の中からさらに、指揮官と駆逐艦に関する記憶を掘り起こしていく。

アーク・ロイヤルは艦隊の中でも比較的古参であり、この場にいる者の中ではエンタープライズに次いでこのマドラス基地に着任した古株の艦であった。艦隊や指揮官の昔の話というものはそれだけでも貴重であり、指揮官に好意を寄せる者が古参の艦にエピソードを尋ねる風潮があつた。アーク・ロイヤルも例に漏れず、駆逐艦達にそのような話を教えて欲しいと言われて話すことがよくある。……彼女からしてみれば役得である。

この場にいる者達も指揮官の昔の話に興味があるようで、彼女達は会議が始まってから最も集中していた。

「……ああ、そうだ。駆逐艦の妹達が、委託後に……」

3話

時は遡り、アーク・ロイヤルが秘書艦を務めていた時のことである。指揮官とアーク・ロイヤルが委託任務の報告書に目を通して整理している、彼はアーク・ロイヤルに「相談がある。君の意見を聞かせて欲しい」と頼み込んだ。

「閣下が私に相談……？」

アーク・ロイヤルはその性癖故に、自身のことで駆逐艦達が指揮官や他の艦に相談することはあれど、自身が誰かに相談をされるといのは滅多にないことだった。

「わ、私が閣下の望むような助言を出来るかは分からないが……このアーク・ロイヤル、全力で答えよう！」

「君は戦場以外でも頼もしいな。本題なんだが……」

指揮官の相談は、『委託任務における駆逐艦達の士気の維持・向上の方法』だった。この頃のマドラス基地は所属する艦船少女の数が増え、それに伴って委託任務の受注数が増えて委託の難易度も上がっていた。指揮官は海域への出撃よりも委託任務への参加が多くなってしまいがちな、練度の低い駆逐艦達の士気が下がってしまうことを危惧しており、ここ数日頭を捻っていた。

そこで白羽の矢を立てたのが、アーク・ロイヤルその人である。

確かに、彼女の駆逐艦に対する言動には問題があるが、そんな彼女だからこそ、駆逐艦の子達が喜んだりやる気が出るようなアイデアを考えてくれると踏んだのだ。

「むう、成る程。駆逐艦の妹達の士気を損なわないように……か。閣下は今のところ良い案はあるのか？」

「初めは委託をこなした数を自他共に可視化できるようにしようとも考えたが、それでは効果的な子とそうでない子の差が大きいだらうと……」

「確かに、その方法だと「負けないぞー」と意気込む子と、一方で劣等感を感じる子が出る。なんにせよ、順位を付けるような方法はあまり好ましくないな」

「やはりそうなる、か」

指揮官は、椅子の背もたれに背中を預ける。だいぶ煮詰まっている様子である。

「なら、委託任務をこなす毎に何かお菓子をあげる、というのはどうかな」

「お菓子か…… 悪くないと思うぞ。褒美を与えるのは良い案だが、少しありがたみに欠けるといっつか……」

「ううむ……」

「努力に見合った褒美…… ハッ!!」

「またもや話が振り出しに戻るかと思われたその時、アーク・ロイヤルに電流走る。」

アーク・ロリコンと呼ばれる彼女は、伊達に24時間も駆逐艦達のことを考えていない。

『『スタンプカード』だ……!!』

「スタンプカード?」

「そうだ! 委託任務をこなす毎にスタンプが1個貯まり、一定数貯めればお願いを聞いてもらえる、というものだ!」

「……成る程、確かにそれなら苦労と見返りが釣り合っているし、達成感も伴う。ただ、『お願いを聞いてもらえる』というのは少々自由度が高すぎるような……」

「流石に、何でも叶えていたら閣下も大変だろう。だが、駆逐艦の子達は閣下が困るようなお願いはしない筈だ。アーク・ロイヤルがこの身に誓おう」

アーク・ロイヤルの指揮官を見つめるその目は、自信と駆逐艦への一方的な信頼に満ち溢れており、艦隊の旗艦を務めた時のそれと同じだった。指揮官はアーク・ロイヤルのその目を見て、彼女の提案を実行することに決めた。

「君の提案を参考にしよう。早速明石に言ってスタンプカードとハンコを用意してもらおう」

「私の意見が参考になって良かったぞ。駆逐艦の妹達はどんな可愛らしいお願いをするのだろうか…… フフフフ」

得意げに、かつ満足げに微笑むアーク・ロイヤルだが、指揮官はそんな彼女へある提案をした。

「アーク・ロイヤル、私からも提案があるのだが」

「うん…？ 何だろうか」

「スタンプカードにハンコを押す係は、アークロイヤル、君に一任しても構わないだろうか」

「なん…！？」

瞬間、アーク・ロイヤルの脳裏には、スタンプカードを持った駆逐艦達が自分を囲むように集まり、「お姉ちゃんありがと!!」と満面の笑みを向ける楽園のような光景が広がっていた。

「か、かか閣下！ そのような駆逐艦達を労うような役目は、閣下の方が相応しいのでは…！」

「委託任務を終えて疲れているだろうに、わざわざ執務室まで足を運んでもらうのは彼女達に悪いだろう。それに、君は相談に乗ってもらどころか素晴らしい案も出してくれた。これくらいの役得があってもバチは当たらない筈だ」

「閣下…！ このアーク・ロイヤル、一生ついていきます!!」

その後、マドラス基地に導入されたスタンプカード制度は駆逐艦を中心に好評となった。今ではスタンプカードはこの基地の日常の一部になっている。駆逐艦達が指揮官へ「頭を撫でてもらう」などの可愛らしいお願いをしていると「駆逐艦だけずるい」という声が他の艦種の艦船少女達から上がり、今では全ての艦船少女が各々のスタンプカードを所持している。指揮官への「お願い」がどれ程のもので許されるのかを競うチキンレースが一部の艦船少女達の間で行われていたのは、また別のお話。

一方アーク・ロイヤルは、それまでの駆逐艦達の「ロイヤルのおかしな空母」という印象が「スタンプカードのお姉さん」に変わり、ハンコを押して駆逐艦達と交流できる喜びに震えて涙を流していたという。だが、ハンコを押す時の緩みきった変態じみた笑顔は今でも変わらないらしい。

このスタンプカード制度が「早朝に駆逐艦達に体操をさせ、その姿を眺めた後、スタンプカードのハンコを自分がつく」という妄想から生まれた産物であることは、妄想していた本人だけが知るところである。

「……………」と、こんなことがあったんだ。もし閣下が本当にロリコンならば、駆逐艦の妹達にハンコを押す役目を私に任せたりはしなかっただろうな。駆逐艦の子達を見る閣下の目は私のような目ではなく、慈しむ目だ」

「ふーん、あのスタンプカードってアナタの発案だったのね」

「アーク・ロイヤル、そういう事はもっと早く教えなさい！ さっきのあなたの無礼を許してあげるわ！」

「さて、彼女の証言で指揮官はロリコンではないことが明らかになったな。本題に戻ろう」

プリンツ・オイゲンとクイーン・エリザベスはアーク・ロイヤルがスタンプカード制度を作ったことを知って感心していると、エンタープライズが会議を次の段階に進めた。すると、プリンツ・オイゲンはここまでの話を踏まえてある仮説を提唱する。

「ねえ、ロリコンでもないなら、指揮官ってホモなんじゃないの？」

プリンツ・オイゲンが冗談で放った一言は、さながらツァーリ・ボンの如く、ロリコン疑惑の時よりも強い衝撃を与えた。

しかし、ロリコン疑惑の時とは異なり、それを否定する材料は会議に参加している者の中から出てきた。

「それはありませんわ。一昨日、指揮官様が執務室で寝落ちてしまった時にそのメイドが膝枕をして、指揮官様は満更でもなさそうでしたから」

「……………」

クイーン・エリザベスの後ろに立っている『膝枕』をした張本人は、大講堂の中で自分以外の全てを敵に回していた。ある者は全身の毛を逆立てて狐火を揺らめかせ、ある者は艤装を展開して鋼鉄の牙から火花を散らしている。もはや、赤城が何故それを知っているのかを聞こうとする者はいない。

「静粛に頼む。運が彼女に傾き、彼女がそれを自身の実力で掴んだだけのことだ」

大講堂の中に広がっていた、吸い込むだけで命を手放してしまいそうになる程の殺気は、エンタープライズの一声によつて発生源へと還っていった。これらの殺気を放っていた者達とそれを身一つで受け止めていた者が熟練の手練であり、会議の司会が彼女達と同等かそれ以上の強者であるからこそ、この場合は全員の度量の広さによつて収まったのだ。

「気を取り直して会議を進めよう。他に何か意見はないか？」

「あの庶民は誰かとケツコンするのに怖気付いてるんじゃないかしら」

先程の殺気に満ちた空気がまるで冗談だったかのように、クイーン・エリザベスはいつもの調子で呆れたように言った。

「笑わせる。それは違うぞ、ロイヤルの女王よ」

ここにきて、グラーフ・ツェッペリンが初めて口を開いた。

「指揮官は我が卿と呼び、我が選んだ強者だ。臆病者とは言わせん」

「グラーフ・ツェッペリンの言う通りだ。あいつは私を征服するに足る強き者だ。もしあいつが弱き者ならば、あいつに征服されている私は犬畜生か何かだろう」

「つ、つまりグラーフ・ツェッペリンと加賀は、指揮官が指輪を渡せないんじゃないかって、指輪を持っていないと思ってるってことか？」

あの一航戦の加賀が、例え話とはいえ自分を「犬畜生」と言ったことに何名かが驚いたが、クイーン・エリザベスに反論したグラーフ・ツェッペリンと加賀の言葉をクリーブランドが解釈して、確認するように質問を投げかける。そしてその答えは……

「そうだ」

『『そうだ』って、最初から分かりやすく言ってくれよ……でも、加賀がそこまで言うなんて、よっぽど指揮官を認めてるんだな』

「…… まあ、な」

「折角だからさ、何か指揮官のこと聞かせてくれよ。何か分かるかもしれないし。良いだろ？ エンタープライズ」

「私も是非聞いてみたいものだ。クリーブランドの言う通り何か気づくことがあるかもしれない。話を聞かせてくれないだろうか」

「……… はあ」

気付けば既に、加賀が話をする空気になっていたので、加賀は渋々話すことにした。

「私も一航戦の話を是非聞かせてもらいたいものだ」

（まだ居たのか、変態空母………）

「そうだな、確かあれは………」

4話

マドラス基地の執務室では、指揮官が海域攻略艦隊の編成に頭を悩ませていた。『ノーマル海域』と呼ばれる海域であればその悩みは多少……というよりかなり解消されるのだが、今回マドラス基地が攻略する海域は所謂『ハード海域』。艦隊を編成する際の艦種に制限が設けられ、艦を自由に編成することができないなんとも面倒くさい海域である。

第一艦隊の編成は既に決定しているのだが、悩みの種は第二艦隊……の主力艦隊。空母が1隻しか編成できず、その1枠を巡って赤城と加賀が執務室まで直談判をしに来たのだった。赤城と加賀が出撃する時、2人はほとんどセットであり、2人のどちらかが別の艦隊に組み込まれる、という事は滅多に無い。近頃の2人は練度をメキメキと上げており、加賀は自身の実力を指揮官と赤城に見せつけられる絶好の機会だと思っていた。

「指揮官様あゝ♡是非この赤城を出撃させてください。私を出撃させてくれた暁には、敵を綺麗さっぱりソウジしてご覧に入れますわ〜」

「姉様は私がいなければ1人で突っ走るだろう。私ならばそのような心配は要らないし、姉様以上の戦果を挙げてやるぞ」

「かぁーがあー……？」

「例え姉様であっても、私から戦場を奪うことは許さん」
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

赤城と加賀の間では赤と青の狐火がぶつかり合い、まさに一触即発。このまま執務室の中で「勝った方が出撃する」と言い出して取っ組み合いを始めてもおかしくない。普段は冷静な加賀だが、今回の海域はまだ攻略艦隊が出撃したことのない未開の海域であり、その出撃の1枠を奪い合う相手が赤城という自身の姉だからこそ、今の加賀には「より強い敵と死合いたい」「指揮官に今の自分の実力を見せたい」「姉様より自分を選んで欲しい」などの気持ちが渦巻いており、譲れないものがあつた。

「加賀、貴女がここまで食い下がるのは珍しいけれど、だからといって私が譲るとでも思っているのかしら？」

「姉様こそ、自分が選ばれた気にいるのか？ 狐が狸の皮算用とは、滑稽なものだな」

「……そこまでだ。いい加減にしろ」

赤城と加賀から殺気が滲み出したのを見計らって、指揮官が二人をたしなめた。

「今からここで暴れられたらたまったものじゃない」

「指揮官様、この赤城がそのようなことをするように見えますか？」

「それを言うのはその爪を引っ込めてからにしろ」

「あら、いけません。うっかりしていましたわ」

赤城が指揮官の前で行う一挙手一投足は全て故意のものであることを指揮官と加賀は分かっていたので、2人は赤城の、実に白々しい台詞については触れない。すると、加賀は指揮官の机に突いていた両手を離した。

「……分かった。これ以上私と姉様の醜態を晒す訳にはいかん。お前がより強いと思う空母を選べばいい」

「そうか。赤城もそれでいいな？」

「……赤城は指揮官様が仰る事に従いますわ」

「ふむ……」

指揮官は手元にあった書類に再度目を通して複数枚の紙を何度も見比べていたが、そんな時間が数十秒程過ぎると、指揮官は手にしていた書類を机の上に戻して目の前の2人にこう言った。

「今回の第二攻略艦隊の空母は、アーク・ロイヤルに一任する」

「……一体どういうつもりだ。私でもなく、姉様でもなく、あのロイヤルの変態空母だと……？」

加賀は指揮官の意思ならば百歩譲って、自分ではなく赤城が選ばれても良いと考えていた。しかし、指揮官は自分でもなく、赤城でもなく、アーク・ロイヤルを選んだ。

「……私達一航戦があこのロイヤルの変態空母に劣ると、お前はそう言っているのか？」

今の加賀は、先程赤城と睨み合っていた時よりも激しく……実に激しく怒っていた。それは、自分が姉より劣ると言われるよりも、一航戦がロイヤルの空母に劣ると言われたことがなによりも屈辱だからだった。赤城は自分の横に立っている妹が戦場で敵と殺し合う時の殺気と同じものを感じ取っており、表情には出さないが、いつ加賀が指揮官に襲いかかるのかと心の中では加賀の怒り様に動揺していた。

「指揮官様も考えがあつてそのような判断をされたはず。まずは指揮官様の言うことを聞きなさい」

一航戦の2人がマドラス基地に来てから暫くするが、赤城と加賀はほぼ同じスピードで練度を上げてきた。しかし、今加賀が指揮官に飛びかかったとして、赤城は妹を指揮官に傷一つ付けることなく止められるかと聞かれた場合、「はい」と答えられる自信は無い。赤城が加賀をたしなめたところで、指揮官はゆつくりと言ひ聞かせるように話し始めた。

「君達の航空攻撃の素早さはこの艦隊随一だ。敵の主力艦隊が攻撃する前に航空機を発艦させて制空権を奪い、2人の航空攻撃の連携で敵艦隊を灰燼に帰すことができるだろう」

「そこまで私達一航戦の実力を認めていながら、何故奴を選ぶ」

指揮官は加賀から睨まれながら、平然と話を続ける。

「君達も知っているように、今回の第二艦隊には空母が一隻しか編成できない。そこで私は、当艦隊の空母の単艦航空攻撃能力を重視した」

「確かに一航戦の航空攻撃は魅力的だ。だが、それは2人の連携に依る部分が大きい。2隻の空母の航空機による高速発艦及び制空権の獲得は君達の強みだが、赤城か加賀のどちらか片方の出撃となると、現状ではその強みは半減どころかそれ以下になってしまう」

「君達はその能力をそれぞれ別の空母と発揮できる程、他の空母とは連携が取れていない……これは私の編成指揮の問題でもあるな」

指揮官はそうやって机の上の書類に目を向けると、1枚の書類を手に取る。

「今回の海域攻略にあたって、偵察艦隊を出撃させていた。……これがその報告だ。これまでの海域よりも駆逐艦や軽巡洋艦の数が多いいことが判明している。このような場合、編成に制限がかけられていることも考慮すると、第二艦隊の空母には面制圧力が求められる」

指揮官は次に赤城と加賀の詳細が書かれた書類に目を通した。

「単艦の空母が面制圧力を発揮できるのは、戦闘機と爆撃機による爆弾の投下と、攻撃機による航空魚雷だ。この内、航空魚雷は一点に向かって進む重桜式と、進行方向に対して列を成し、平行に進む汎用式があるのは君達も良く知っているだろう」

「先程も言った通り、今回の空母には面制圧力が求められる。つまり、この場合は重桜式の航空魚雷よりも汎用式の航空魚雷の方が適していると言える。君達2人は重桜式航空魚雷の扱いには長けているよのだが、まだ汎用式航空魚雷の扱いには慣れていない」

「私が君達の実力を測り違うことは、君達の命の危機に直結する。……先程述べたことを考慮し、君の言葉を尊重した結果、君達よりも練度の高いアーク・ロイヤルに決めた。分かってもらえたかどうか」

ぐうの音も出ない。

指揮官は赤城と加賀の一航戦としての得手不得手だけでなく、2人の航空機の扱い方まで把握していた。

指揮官の考えを一通り聞いていた加賀の怒りはいつの間にか収まっており、平常時の冷静な彼女に戻っていた。

（『お前がより強いと思う空母を選べばいい』）

「……そうか……。そうだったな。元より私はお前に征服され、力を振るう相手、力を振るう場所をお前に決められた身だ」

加賀はそう言うのと指揮官に背を向け、執務室の扉の方へ足を進めていた。

「今回は見逃してやるが……。次は出撃させてくれ。それに見合う強さを身につけて、お前の目に焼き付けてみせよう」

「期待している。私の方でも他の空母との編成や装備について再考しておこう」

加賀はそのまま何も言うこと無く執務室を後にした。その顔が満足げに微笑んでいたことに気付けたのは、横に立っていた赤城だけだった。

「……………指揮官様、ありがとうございます。一航戦として、あの子の姉として、感謝致します」

赤城はそう言って頭を下げた。普段の彼女は指揮官の前でその愛を抑えることが出来ずに直線的な言動をとっていたが、今の彼女は執務室に指揮官と二人きりなのにも関わらず、普段の言動が嘘の様である。

「感謝…？ 私は君達の出撃したいという熱意を踏みにじってしまった。恨まれこそすれど感謝される覚えは無い」

「いえ、出撃なら今後幾らでも出来ますわ。それに、指揮官様は私達に強くなる機会を与えてくださいました。今更ながら、現状の未熟な力を指揮官様に御覧に入れようとしていた私が恥ずかしいですわ」

「それ…に、あそこまで怒った加賀をたしなめますわ…♡」 赤城、もつともつと指揮官様を愛してしましますわ…♡」

赤城の普段とは違うお淑やかな態度は、ほんの数秒程で終わってしまった。

「……………」とにかく、今回の海域攻略については先程言った通りだ。君にも期待している」

「はい♪ この赤城、指揮官様への愛をさらに磨いてきますわ…」
その後、赤城と加賀の稽古は二航戦の蒼龍、飛龍を巻き込んで熾烈を極め、五航戦の翔鶴、瑞鶴が艦隊に着任してからは地獄絵図と化した。

一航戦の2人は他の陣営の空母とも出撃するようになり、汎用式航空魚雷の扱い方などを学んで吸収し、今でもその練度と実力を高め続けている。

5話

「そんなことがあったのか。流石は指揮官だな。加賀、聞かせてくれてサンキュー！」

「今思えば、かつての未熟な私のみつともない話だったな」

加賀に話を催促したクリーブランドが話し手に礼を言うと、頃合いを見計らったエンタープライズが会議の進行を再開した。

「ローキーで。加賀の心温まる話が聞けたところで、本題に戻ろう」

「グレイゴースト、今度の出撃では背中に気を付けることだ」

「貴女は姉と似たような事を言うんだな」

エンタープライズと加賀が線香花火程の小さな火花を散らしていると、プリンツ・オイゲンが呆れかえったようにため息を漏らして言った。

「ここまでアナタ達の思い出話を聞かせてもらったけど、何も進展してないじゃない」

プリンツ・オイゲンの一言によって、会議に参加している者達は指揮官との思い出話に花を咲かせて、肝心の議題がほとんど進展していないことに気付く。

「はあー……………結局こんなことになるんじゃないかって思ってたら……………」

「ま、まあ、指揮官がロリコンじゃないって分かったり、指輪を渡すのを怖がるような人じゃないって分かったじゃないか」

クリーブランドは会議の雰囲気落とさないように前向きなことを言うが、結局会議が振り出しに戻ってしまったことには変わりなかった。

「やっぱり、私達がここで話しても何も解決しないんじゃないの？」

「今まで私達が何もしなかったからこそ、この惨状がある。なにも、会議そのものを否定することはないだろう」

エンタープライズはプリンツ・オイゲンにそう言うが、どうやら彼女の考えは少し違うらしい。

「私は会議がダメだって言ってるんじゃないくて、このメンツで会議し

ても結局何も分からないでしょ？　って言ってるのよ」

「む、そうだったか。すまなかつた」

エンタープライズはプリンツ・オイゲンの考えが自分の思っていたことを謝った。

すると、何か思いついた様子のプリンツ・オイゲンが片手を上げる。

「私から、参考人として初期艦の召集を提案するわ」

「我也賛同する。もはやここに居る者達で導き出すのは限界だろうな」

プリンツ・オイゲンの提案にグラフ・ツェツペリンが乗った。他の面々も会議が煮詰まり始めていることを悟ったようで、誰もその提案に『待った』をかける者はいなかった。

「艦隊の最初期ならば、ロング・アイランドとジャベリンだな。しかし、ロング・アイランドはおそらく会議の中継を見ていないだろうとなると……」

このまま消去法でいくとこの場に呼ばれるのはジャベリンなのが……　なのだが……

(ジャベリン……　ダメそう……)

という考えが、声に出さなくとも全員の共通理解だった。

「じゃ、ジャベリンを呼んでもいいのだが、ここは電話を通して簡単な質問をするのはどうだろうか」

ジャベリンがアーク・ロイヤルの時のように「ジャベリン、全力でいきまーす!!」と言って、急に大講堂に突撃してくる可能性を察知したエンタープライズが機転を働かせた。ジャベリンをここに通してしまった場合、彼女は指揮官との思い出をノンストップで夜明けまで延々と話し続け、会議が崩壊しかねない。

エンタープライズの意見に皆が無言で首を縦に振る。エンタープライズは端末を手に持ち、ジャベリンへの通話ボタンを押した。会話の内容が会議室にいる全員に伝わるように、スピーカーになっている。少し待つと、通話が始まった。

「こちらエンタープライズだ。中継を見て分かっているとは思いますが、君に幾つか質問がある。構わないだろうか」

(はくくい！ 私です！ ジャベリンです!! 全然オツケーですよ！ ドンと来い！ です!!)

この台詞を聞いた瞬間、大講堂の全員が「電話で良かった……。」とそれぞれの心の中で呟いた。

「では、指揮官が最初にジャベリン…… 君を選んだ理由を知っているだろうか」

(はい！ 前に指揮官に聞いて教えて貰いました！)

「……そして、彼女達の不安はすぐさま現実のものとなる。

(そうですねくくあれは確か私が改造してもらった時のことです私が指揮官にどうして綾波ちゃんやラフィーちゃんじゃなくて私を選んでくれたのか聞いたんですけど最初は指揮官は恥ずかしがって話してくれなかったんですでもどうしても知りたくて気になったので粘り強く聞いてみたら私を改造してくれた時にやっと教えてくれたんです指揮官は「恥ずかしながら、当時の私は艦船少女との関わり方について不安や疑問があった。天真爛漫な君ならばそちらから話しかけてくれて、会話に困ることが無いと思った。君達の指揮官としてなんとも不甲斐ない話ですまない」って言ってたんですよ指揮官って普段は厳しそうで笑うことも少ないし全然振り向いてくれないけど偶にお茶目なところがあるんですよねもうホントこういうジャベリンにだけ見せてくれる可愛い所がたまらな「よし分かった、微笑ましい話だなジャベリン」

(え？ そんなこと言わずにもっと色々聞いても良「ありがとうジャベリン。実に有力な情報だった。協力感謝する」

その時、誰しもが「あ、こいつ面倒くさくて切ったな」と思ったそうなの。

ジャベリンから話を聞くことは失敗に終わったが、プリンツ・オイ

ゲンはめげなかった。

「最初の秘書艦に話を聞くのはダメだったけれど、秘書官じゃなくて艦隊が発足してすぐに着任した子に聞くのもアリなんじゃない？」

「そっか。ジャベリン達とその後に着任した子達の時間の違いって、ほとんど無いもんな」

クリーブランドも彼女の意見に賛成的であり、手元にあつた建造関係の資料に目を向けた。

他のメンツは先程のジャベリンの件で士気の大半を削り取られていたが、クリーブランドが読み上げた資料の中にとある艦船少女の名前が出てきたことで、それは一変した。

「えっと……着任記録によると、ロング・アイランドとジャベリンの次は古い順に、ハムマン、ノーフォーク、クレセント、レパルス、ノーザンプトン、シュロップシャー、エンタープライズ……って、エンタープライズ! そんなに昔からいたのか!!」

「確かにそうだが、そんなに驚くことでもないだろう」

現在この大講堂にいるメンバーの中で最も古く着任したのはエンタープライズである事は全員が承知していたが、まさか指を折って数えるレベルの古参であることは誰も知らない事実であった。

「何で今まで黙ってたんだよ……その頃に着任したんだったら、秘書艦になった回数も多いんだろ? 今まで何回なったんだ?」

クリーブランドを含めた全員がエンタープライズの着任時期に驚いたが、そんな彼女の次の言葉は大講堂内にさらに強い衝撃を与える。

「指揮官は着任した私をすぐに秘書艦に任命して、第3海域を突破する頃までは常に私が秘書官だったんだ。だから、今までの秘書艦業務を回数で答えるのは難しいな」

(なん……だど!?)

現在、このマドラス基地での秘書艦業務は1週間毎の交替制である。しかし、それは指揮官が着任してから現在までずっと続いてきたのではない。……ある時期から交替制になったのだった。そして、交替制が始まるより前にこの艦隊でずっと秘書艦を務めてきた

人物こそ、エンタープライズである。

(あれ? でもこれって……)

彼女達は気付いてしまう。

艦隊が発足して間もない頃から秘書艦として指揮官をサポートしてきたエンタープライズが、何故この場で指揮官に関する会議に参加し、司会を務め、自分の後に着任した艦達のエピソードを聴いているのか。

「その時の私がかつていたのは、指揮官が真面目で…… そう、彼は真面目過ぎるんだ…… 私だって何もしなかった訳じゃない…… けれど彼は秘書艦を交替制にしてしまつて……」

当時の事を思い出しているであろうエンタープライズの目からはハイライトが消え、深く暗い瞳になっている。

当時の彼女はまだ好感度が愛に達していなかったとはいえ、指揮官に少なからず好意を寄せていた。戦闘では常に旗艦として出撃してMVPを取り、艦隊最高峰の練度と秘書艦の座を欲しいままにしていたが…… それがある日から、秘書艦から外されて旗艦を務めるどころか、海域に出撃することも少なくなつたのである。その時の彼女の落ち込み様は、それは凄まじいものだったという。「本物のゴーストにならないか心配で、気が気じゃなかった」とはホーネットの談である。

……ある意味、一番可哀想なのはエンタープライズなのかもしれない。

「アナタ大丈夫? 随分顔色が悪いようだけど……」

「ああ、大丈夫だ。司会進行としてここで沈むわけにはいかないからな…… コツフ」

クイーン・エリザベスが心配する程顔色が悪いエンタープライズであつたが、謎の嘔吐きを挟みながらも席を外さないのは流石といったところか。

「エンタープライズ、我から1つ良いだろうか」

エンタープライズが過去の苦い思い出に打ちのめされて会議全体の雰囲気も悪くなってきていたが、そんな中でもその威厳を保ち続けているのは、グラーフ・ツエツペリンである。

「先程の着任記録の話だが、初めての建造で着任したのはノーフォークだそうだな。ここまで艦隊発足当初の話はあまり参考にならないかった聞けなかったが、彼女なら我々に有益な話をしてくれるのではないだろうか。ハムマンも考えたが、彼女はあまり指揮官の話をするのは得意ではないだろう」

グラーフ・ツエツペリンは心の中で台詞に棒線を引きながら、艦隊で3番目に着任したカウンティ級重巡洋艦のノーフォークを推した。「ノーフォーク……あの盾を出すロイヤルの重巡か。グレイゴーストよりも先に着任したのなら聞いてみる価値はありそうだな」

加賀の『盾を出すロイヤルの重巡』という覚え方はいささか失礼だが、ノーフォークは内気な性格と海域への出撃頻度の低さが相俟って、この大講堂に集まっている各陣営の主要人物達のような有名人ではない。

「……しかし、彼女もれっきとした好感度・愛の艦船少女であり、指揮官に想いを寄せる一人である。」

ここが好機と読んだクイーン・エリザベスは半ばダウン気味のエンタープライズの言葉を待たずに、アーク・ロイヤルの時と同じように中継カメラに向かって指を指す。

「ノーフォーク！ 女王命令よ！ 今すぐ大講堂に来なさい!!」
(陛下、良かったですね)

クイーン・エリザベスはアーク・ロイヤルの時に格好がつかなかったことを割と根に持っていたようで、今回の女王命令がビシッと決まったことをひどく喜んでいる様子である。

そしてその数分後、召集を受けたノーフォークが大講堂に到着した。

6話

「えっと……………あの……………その……………よろしくお願いしま
す……………」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。早速だが、指揮官について何か話せることがあったら聞かせてくれないだろうか。私が着任するよりも前の事を話してくれると助かる」

どちらかと言えばお願いするのはこちらの方である、というツッコミはさておき、エンタープライズは早速大講堂に到着したノーフォークに話をするよう促した。

「エンタープライズさんが着任する前の話、ですか……………分かりました、ノーフォーク……………が、がんばります……………」

会議室にいるメンバーは「こんなにオドオドしていて話ができるのだろうか」と心配していたが、ノーフォークは自分の指揮官との記憶を掘り起こし、ポツリポツリと話し始めた。

ノーフォークは指揮官の初めての建造で着任した艦船少女である。その時既に着任していたのはロング・アイランドとジャベリン、ハムマンだけで、彼女は早速第一艦隊の前衛艦隊に編成された。その後、海域を攻略してクレセントとレパルスが着任するが、艦隊内の重巡洋艦はノーフォークただ一人であり、指揮官は彼女に対して艦隊唯一の巡洋艦として期待を寄せていたのだが……………

ノーフォークには、ある悩みがあった。

コンコンと執務室の扉が叩かれると、扉の向こう側からか細い声が聞こえてくる。

「ノ、ノーフォークです……………失礼します……………」

「ああ。入ってくれ」

ノーフォークが執務室に来るのは着任の挨拶に来た時以来であり、彼女は目に涙を浮かべながら非常に緊張していた。というのも、今回

彼女が執務室に来たのは他でもない指揮官からの呼び出しを受けたからである。この時のノーフォークは「指揮官に怒られる」と思っており、気が弱い彼女からすれば目が潤む程緊張するのは無理もないことだった。

「そこに座ってもらえるだろうか」

「は、はい。失礼します……」

ノーフォークは指揮官の顔色を何度も伺いながら、ゆっくりと、慎重に腰を下ろす。

「まず、先日も海域へ出撃してもらったばかりなのに急に呼び出して済まない。君のことで話をしたかった」

「わ、私……何か悪いことしましたか……？」

「悪い、という言い方は出来るかもしれないが……君にとってあまり良くないことには違いない」

ノーフォークは胸の辺りがキュウツと引き締まるのを感じて、思わず両手でそこを抑える。

「指揮官……あの、ごめんなさい……」

「……私はまだ何も言っていないぞ」

彼女は『自分が何か悪いことをしてしまった』と感じたら反射的に謝る癖が付いていたが、指揮官はそのことについて触れるのは今ではないと考え、話を続ける。

「話を戻そう。君のスキルについてだ」

ノーフォークのスキル『正面装甲』は敵からの攻撃を受けると発動し、前衛艦隊の前方に敵弾を防ぐシールドを1枚展開するというものである。現在マドラス基地の艦船少女でシールドを展開するスキルを持っているのはノーフォークだけであり、指揮官は彼女の耐久力とそのスキルによる前衛艦隊の継戦能力の上昇を期待していたのだが、そこにはある問題があった。

「率直に言えば、君は自身のスキルを満足に使いこなせていない。心当たりがあるだろう」

「はい、その通りです……」

指揮官の言う通り、ノーフォークはスキル『正面装甲』を自分の意

思で発動することができていない。戦場で敵からの攻撃を受けた時にたまたま発動することはあるが、激しい攻撃を受けたここぞという時に自発的にシールドを展開することができないのだ。彼女が戦術教室で自身のスキルについて勉強をし始めてから暫く経つが、シールドそのものの耐久力は上がっているにも関わらず、それを自分の意思で出せていない。このことは、指揮官だけでなくノーフォーク自身も気にしていたことだった。

「戦術教室での勉強の成果として、シールドの耐久力が上昇している傾向は見られるが……」

彼女は前述の指揮官の考えにより、敵からの被弾が最も多い前衛艦隊の一番前に配置されている。しかし、彼女が今後もスキルを自分の意思で発動できなければ、前衛艦隊の編成について再考しなければならぬ。指揮官がノーフォークに関する資料に目を通して見ると、彼女は急に立ち上がって頭を下げた。

「ごめんなさい！ 私…… 砲撃も魚雷の発射も苦手なのに、シールドも出せないなんて…… 役立たず、ですよね……」

ノーフォークは頭を下げてたままにいるが、指揮官が何も言わないことが怖くてそのまま動けないでいる。しかし、十数秒程続いた沈黙は指揮官によって破られた。

「ノーフォーク、どうか頭を上げて欲しい。私は君をスキルのことで怒ってなどいないよ」

「……え？」

「そんなことより私が余程怒っているのは……君が自分を『役立たず』と言ったことだ」

ノーフォークは指揮官に対して「常に表情を崩さないしっかりとしまじめな人」という印象を持っていたが、持ち前の気の弱さに起因する他人への察しの良さで、自分の目の前にいる人物が「怒っている」ことに気付く。

「全ての艦船少女達一人一人に役割があり、個性があり、信念がある。艦隊において、役に立たない艦船少女など一人としていない。……」

私ができるような艦隊にしてみせる」

指揮官はノーフォークの瞳を真つ直ぐ見つめながら言葉を続ける。「誰にもノーリー例えその子自身にも、絶対に『役立たず』などとは言わせない」

指揮官はそう言うのと椅子から立ち上がり、執務室の扉の方へと向かう。

「今から君には先程の発言を撤回してもらおう。30分後に、艦装を展開した上で体育館に待機しておくように」

「……え？ 体育館……？ 艦装……？ あ、あの、しきかーん！」

指揮官はそのまま執務室を後にし、そこには怒った指揮官を初めて見て半ば放心状態になっているノーフォークだけが取り残された。

30分後、ノーフォークは指揮官に言い渡されたように艦装を展開して体育館で待機していた。

(どうして体育館に……それも艦装を展開して……)

少しすると、体育館の扉の方から声が聞こえてきた。

「待たせてしまったかな。それでは始めようか」

声の主は指揮官だった。彼の姿は普段身につけている軍服ではなくスポーツウエアのようなものであり、その手の中には数個のバレーボールくらいの大きさのボールが抱えられている。

「あの…… 指揮官、これから何をしますか……？ わっ」

指揮官を不安そうに見つめるノーフォークに対して、彼はボールを1つ彼女へ放り投げて言った。

「特訓だ。これから、シールドを展開する練習を始める」

「ええ!? 指揮官が私と……ですか？」

「そうだ。なんせ、私が発案者だからな。最後まで付き合うのが筋だろう」

「そ、そうですか……」

なんと、指揮官はノーフォークがシールドを自分の意思で展開できないようになる為に、この体育館で練習をしようと言うのだ。それも、自分も一緒に。彼女は指揮官の考えにひどく困惑したが、彼が先程執務室で自分に言った言葉を思い出して、指揮官が自分の為に何かしてくれているのだと考え、申し訳なさが半分嬉しさが半分といった気持ちだった。

「少し資料を探して、君のスキルに関して調べた」

「現在、君のようなスキルを有している艦船少女は複数隻確認されている。それらは全て複数枚の回転するシールドを生成するものだが、君のそれは一枚の固定シールドを前面に展開するものだ」

「うう…… 私だけ一枚しか出せないですね……」

ノーフォークは自分だけがシールドを一枚しか生成できない事を知って落ち込むが、指揮官は話を続ける。

「だが利点もある。先程言ったように、君以外の艦のスキルは『回転する』シールドを展開するのに対して、君のシールドは『前面に固定』して展開される」

ノーフォークは指揮官の言葉の意味を計りかねているようで、首を傾げる。指揮官はその様子を見てさらに詳しく説明する。

「つまり、回転する複数枚のシールドはその性質故に、必ず一瞬だけ正面にシールドとシールドの『隙間』ができてしまう。しかし、君のシールドは一枚だが常に前面にあって移動しない」

「あっ……」

「あらゆる方向からの攻撃を防ぐのであれば他の艦に軍配が上がるが、正面の防御に関しては君のスキルの方が適している」

「で、でも、やっぱりシールドはたくさんあった方がたくさん攻撃を防げるんじゃないでしょうか……」

「君の言う通りだ。だが、君のスキルと他の艦のスキルで決定的に異なる点がもう一つある」

「えっ……?」

指揮官は2個目のボールをノーフォークに投げ渡す。

「発動条件だ。他の艦のシールドは戦闘開始後からおよそ数十秒毎に

発動するものだが、君のそれは『攻撃を受けた』際に発動する。つまり、やろうと思えばシールドが消えて被弾した瞬間、すぐに次のシールドを展開することが可能なんだ」

「これは、シールドを決まったタイミングでしか発動できないスキルと比べて、敵の攻撃が激しくなるタイミングでシールドを展開することに適していると言える」

「私の……シールドを……」

指揮官は、彼女にしかないシールドの展開方法と発動方法に目をつけていたのだった。

「君は他のシールド系スキルと比べて自身のスキルに引け目を感じているかもしれないが、その実、他のシールド系スキルとは全く異なった魅力を持っている」

「自信を持って。私は君の、そんなオンリーワンの力を信じている」

「……でも、私はシールドを……」

「ああ、自発的に展開することができない。だから、それを克服する為にこれを使う」

指揮官は手に持っているボールを掲げる。ノーフォークは自分が持っているボールに目を落とす。

「えっと、ボールを使ってどんな風に練習するんですか……？」

「それは、ウォーミングアップをしながら話そう。ボールを床に置いて、まずはキャッチボールだ」

「は、はい」

ノーフォークは指揮官の言う通り、持っていた2個のボールを少し離れた場所に置き、指揮官とキャッチボールを始めた。勿論、艦装を展開した状態で。

「繰り返しようだが、君のスキルは被弾時に発動する。言い換えれば、被弾しなければ発動することができない」

「君の他にも、攻撃された時にスキルを発動する艦がいるそうだ。彼女達は攻撃されることによって防衛本能が高まり、それによってスキルを発動するとされている。つまり、君も防衛本能の高まりでスキルを発動している可能性が高い」

「防衛本能の高まり……ですか？」

ノーフォークはいまいち理解できないようで、困った顔をしながらキャッチボールを続ける。

「つまり、こういうこと……だッ」

すると、指揮官はそれまでノーフォークに投げていた山なりの遅いボールではなく、予告なしに速い直球を投げる。

「えっ!？」

ノーフォークは予想外の出来事に思わず顔を手で覆う。しかし、指揮官の投げたボールはノーフォークの顔の横を通り過ぎた。

ノーフォークは臙装を展開しているので動体視力が上がっており、飛んでくるボールを目で追うことはできていたが、それでも突然のことに驚いて防衛姿勢を取らざるを得なかった。

「驚かせてしまったてすまない。しかし、私が言っているのはそれだ。『敵の攻撃に当たりたくない』『痛い』『怖い』といった、生き物なら誰もが持っている、自分を守ろうとする本能だ。その高まりがスキルの発動に繋がる」

「ほ、ほんとうですか……?」

ノーフォークは未だに驚きが冷め止まないのか、両腕で顔を隠す防衛姿勢をとっている。

「確固たる根拠がある訳ではないが、実は君にもその傾向が見られている」

「私に……?」

「ああ。君の出撃記録から、シールドを展開できた状況をまとめてみた。すると、多少練度の低い敵艦隊やこちらから先手を取っている場合よりも、急に敵艦隊からの先制攻撃を受けたり敵主力艦隊のような練度の高い敵と戦う時の方がシールドを展開できている」

「それって……」

「そう。それらは今みたいに、防衛本能が強くなっている時だと考えられる」

「こんな言い方はあまり良くないが……気が弱い君だからこそ、戦場では防衛本能をより引き出せるのかもしれない」

「う、うう……」

ノーフォークは反論できない自分が惨めだったが、指揮官の言ったことに自分でも心当たりがあったので、彼の練習を信じてみることにした。

「ボールをキャッチした衝撃を敵の砲撃による被弾に見立てて、シールドを展開できるようにする。これが私の作戦だ」

「えっと、ボールをキャッチするような弱い衝撃で、シールドを展開できるんですか……？」

「それは分からない」
「えっ」

指揮官のまさかの返答にノーフォークは目を丸くする。

「だが、ボールをキャッチする程度の弱い衝撃でもシールドを展開できるようなれば、実際の戦場ではどんな攻撃でもシールドを展開できる筈だ。要するに、大切なのは感覚を掴むことだ」

「は、はあ……」

この指揮官は確かにしつかり者である。しかし、偶に天然な部分を見せることがあったのだが、今がまさにそれだった。

「今の君は艦装を展開しているから、ちよつとやそつとの衝撃ではなんともないだろう。だから、私もそれなりのボールを投げるようになる。準備はいいか、ノーフォーク」

「はい！ ノーフォーク……が、がんばります！」

こうして、ノーフォークと指揮官の特訓が始まったのであった。

7話

ある日の昼下がりのマドラス基地。そこには、食堂から学園中央の噴水に向けて歩いている2人の少女の姿があった。

「ねえねえクレセントちゃん」

「なによう？」

少女は自分の後ろを歩くジャベリンに声をかけられ、お気に入りピンクのリボンをひらりとなびかせて振り向く。ジャベリンが口にした通り、彼女の名前はクレセントという。ロング・アイランド、ジャベリン、ハムマン、ノーフォークに次いで、5番目にこのマドラス基地に着任したロイヤルのCクラスの駆逐艦だ。

「指揮官のウワサ、って知ってる？」

「指揮官の噂…？ さあ、聞いたことないけど…」

ここ、マドラス基地では艦隊発足から数週間が経過しようとしていた。クレセントとジャベリンは同じロイヤルの駆逐艦ということになにかと顔を合わせて話すことが多く、今日もこうして、寮舎へ向かいながら何とは無しに会話している。だが、今日の会話の内容はいつものそれと少しばかり異なっていた。

「最近ね、指揮官とノーフォークさんが2人きりで秘密の特訓をしているそうなの！」

「ひ、秘密の特訓!？」

瞬間、クレセントは目を丸くして足を止めた。ジャベリンはクレセントが自分の話に興味を持ってくれたことを確信し、嬉々とした表情を浮かべて話を続ける。

「ハムマンちゃんの話だと、この前ノーフォークさんが執務室に呼ばれて、指揮官と2人きりでお話ししてたんだって！ その日から2人でなにかしてるらしいの！」

「へ、へえ〜……………」

（艦隊が発足したばかりだったのに、指揮官はもうあんなコトやこんなコトをしているっていうの!?! しかも、ノーフォークさんにつけ込んでなんて…!!）

クレセントは平静を装っているが、心の中は絶賛エマーゼンシー。『秘密の特訓』という言葉に対してありとあらゆる警報が作動し、あることないこと妄想がポンポンと湧き出ては消え、消えては湧き出ていた……ののだが、当然、それは彼女の誤解である。クレセントにはどこか大人ぶりがる癖があり、それは戦闘時や日常を問わない。現に今もクレセントは腰に手を当て、『大人の余裕オーラ』を出そうと努めている。そんな彼女の性格が災いし、ジャベリンの言葉に対して余計な意味を含めて捉えてしまっていた。

「ジャベリン、とくつても気になるの！ クレセントちゃんも気にならない？」

「ま、まあ、気にならないこともないけど……大人なら当然のコトだし……」

相変わらず余裕ぶつた態度をとろうとしているが、360。どこから見渡しても「興味津々です」と言っているのがひしひしと伝わってくる。

「え？ 2人で内緒の練習をするのは、大人にとって当然のことなの……？」

「な、なんちゃあないっ!! とにかく、行ってみるわよ!!」

「あ、クレセントちゃん！ 待ってよ!!」

そうして、ジャベリンは足早に学園へ向かうクレセントに、急いで付いていくのだった。

クレセントはペースを落とすことなく歩みを進めていたが肝心の場所が分からないことに気づき、はたと足を止めた。クレセントのすぐ後ろを付けていたジャベリンが「ふぎやつ」と言っただけにぶつかってしまったのはご愛嬌。

「で、その秘密の特訓ってのはどこでやってるのよ」

「それがね、ハムマンちゃんもロング・アイランドちゃんも知らないんだって」

「まあ、秘密の特訓って言うくらいだから当然よね」

「でも、何かの練習をするならきつと体育館だと思いの！ さつき執務室の前を通ったら指揮官はいなかったから、きつと今の時間も秘密の特訓を…」

「なるほど、体育館ね……よし、行ってみましょう」

クレセントはジャベリンが的を射た予想を立てたことが先を行かれたようで少し不満だったが、気を取り直して体育館へ向かう。そうして足を進め体育館の入り口に近づいた頃、そこからは物音が聞こえてくるのではないか。どうやらジャベリンの予想は正しかったらしい。クレセントはジャベリンに人差し指を口に当てて見せ、ゆっくりと体育館へ近づいていった。

「……………け……る……………」

「……………い……………で……………」

次第に中にいる人物の声が聞こえるようになり、クレセント達はさらに歩みを進める。そして、中からこちらが見えないように、2人は扉の脇に隠れた。耳を澄ましてみると、先ほどよりもはっきりと会話の内容が聞こえてきた。

「ハア…………… ノーフォーク、まだいけるか？」

「私は大丈夫ですけど、指揮官は……………」

「少し体がなまっていたかな…………… なに、私なら心配いらない」

「そ、そうですか……………」

クレセントとジャベリンは仲良く頭を上下に並べて、扉からちらつと顔を覗かせる。どうやら指揮官とノーフォークの秘密の特訓はこの場所で行われているようだ。クレセントの位置からは指揮官の姿しか見えないが、彼の首筋には汗がたっており、それを見た彼女はドキリとして思わず顔を引っ込めた。

「クレセントちゃん、ウワサは本当だったみたいだね……………！」

ジャベリンは小声でキャ〜〜〜！と叫び、興奮してクレセントの制服の袖を引っ張る。一方のクレセントは初めて見る指揮官の軍服以外の恰好と彼の状態のせいで、心が落ち着かない。

「やはり艦船少女は凄まじいな…………… あれだけ体を動かしても汗一つか

かないとは」

「そ、そんな… 私はただ受け止めているだけですから…」（受け止める…？）

と、ここで再びクレセントの悪い癖が発動してしまう。2人の会話にはなんらやましい要素は無いが、一度スイッチが入ってしまったクレセントの脳内はクリームパイのようなあまーい思考で埋め尽くされて、壊れた翻訳機能が勝手に作動してしまう。

「どうやら、私の方がくらいつく程必死になって、やっと対等になるよ
うだ」

（く、喰らいつく…？ 指揮官が汗をかいてるのって…）

「でも、指揮官… これ以上無理をしたら…」

「心配ないと言っただろう。君がその域に達するのはまだ先だとしても、私は必ず君と一緒にやり遂げよう」

（達する…!? やり遂げる?!? あ、あわわわわわわ）

「わあ〜〜 指揮官とノーフォークさん、なんだかすごく一生懸命に話してるね、クレセントちゃん… クレセントちゃん？」

ジャベリンがクレセントの異変に気付いたが、時既に遅し。

「な、なな、なにハレンチなことしてるのよ！ このケダモノ!!」

クレセントの絶叫はそこが体育館ということもあってか、それはそれはよく響いたのだそうだ。

「なるほどお… それで、指揮官とノーフォークさんはここで特訓してたんですね」

「はい… きちんと説明してなくて、ごめんなさい…」

「提案したのは私だ。説明不足に非があるなら、責められるのは私だろう。すまなかった」

「……………」

「ムスー

「ほら、クレセントちゃん！ 壁に鼠を書いてないで、こっちに来てよー！ 指揮官もああ言ってるんだし…」

「……………」

クレセントは先程の自分の失態が相当応えたのか、完全にいじけモードになってぐすんと鼻をすすっている。言ってしまったえば彼女の自業自得だが、現在のクレセントは、体よりも先に心が大きくなろうとしている繊細な時期の真っ只中にいるのである。

「……クレセント」

指揮官はそんな彼女の姿を見かねて、声をかけた。

「……なによ」

「私が君達にノーフォークとの訓練を説明していなかったことを謝らせてほしい。すまなかった」

「それはさつきも聞いたわよ……」

「が、それを差し引いても……先程の君の言葉を不問に付すには、少しばかり失態の度合いが大きい」

「し、指揮官！ クレセントちゃんも悪気があったんじゃ……」

指揮官はクレセントをかばおうとしたノーフォークを片手で制する。

「そこでクレセント、私はこの艦隊の……君の指揮官として、然るべき罰を与えよう」

「……………」

クレセントの肩がわずかに震える。ノーフォークとジャベリンは、指揮官とクレセントを見守ることしかできない。

「……クレセント。本日よりノーフォークのシールド展開訓練に参加し、彼女のスキルの習熟に尽力せよ。艀装展開の上、至急訓練に参加されたし」

「指揮官……………」

気づけばクレセントは立ち上がり、指揮官の方へ向き直っている。「この訓練の成功をもって弁明とする。早急に準備に取り掛かり、15分後にこの場に戻って来い。以上だ」

クレセントは指揮官の言葉を聞くや否や、勢いよく体育館を飛び出していく。その姿を見送ったノーフォークはヘナヘナと膝から崩れ落ちて床に座り込んだ。

「はあ、き、緊張しました…。指揮官、心臓に悪いですよ…。…」

「ホントそうですよ！ クレセントちゃんが怒られるんじゃないかと思つて、ずっとハラハラしっぱなしでしたよ!!」

ジャベリンはがーつと指揮官に詰め寄るが、当の本人はけろつとしている。

「言葉で謝るよりも行動で示す方が彼女には適していると思っただけだ」

「ーっそうだ！ 指揮官、ジャベリンも一肌脱ぎますよ!!」

ジャベリンは力こぶをつくるように右腕を曲げて意気込むが……

「いや、脱いで貰う肌は間に合ってる」

「ええ!? そんなあゝゝ!!」

ジャベリンは指揮官に縋り付こうと彼に突撃するが、頭をがっちり掴まれ、それ以上彼に近づけない。

「ーっ冗談だ。彼女の力になってやってくれ」

「ですよね、そうですよね！ 指揮官ならきつとジャベリンにそう言ってくれると思つてました!! クレセントちゃんと一緒にすぐ戻ってきますからね!!」

ジャベリンはそう言うと、先程のクレセントに負けない勢いで外に向かつて突撃していった。

「あ、あの…。指揮官」

「なにかな」

ノーフォークは2人の駆逐艦達を見送ると、再び立ち上がって指揮官の傍へ行く。

「私、がんばります！ きつと、スキルを使いこなしてみせます!!」

「ああ。何しろ、心強い仲間が2人も加わるんだ。あとは君の強い気持ちさえあれば、きつとできる」

指揮官が見下ろす彼女の目は、執務室で自らを卑下した時のものとは全く異なっている。今のノーフォークは、自分のために頑張るのではない。みんなのために……。指揮官と、この艦隊の仲間達のために頑張ろうとしていた。

また別の日の昼下がり。食堂には2人の少女の姿があった。だが、いつの日かのそれとは異なり、2人のうち一方は巡洋戦艦である。

「ねえハムマン。最近、ノーフォークだけじゃなくてクレセントとジャベリンも見ないんだけど・・・なにか知らない?」

「ふん。どうせ、あの2人も指揮官と一緒に仲良く遊んでるのよ」

レナウン級巡洋戦艦のレパルスは、テーブルを挟んで向かいに座っているシムス級の駆逐艦、ハムマンに声をかけるが、その返答は素っ気ないものだった。

「なーんか、最近お昼の時間が寂しくなっちゃったよねー」

これまでは昼時になると食堂には4人の艦船少女が集まっていたのだが、近頃、クレセントとジャベリンはお昼ご飯を食べ終わった後、2人ともどこかへ急いで向かってしまう。この艦隊には他にもロング・アイランドという空母がいるのだが、彼女は元々あまり学園に姿を見せない。任務が無い日は、日がな一日、自室で過ごすことが多いようだ。

「っていうかハムマン、『あの2人も仲良く遊んでる』って言った?」

「? そうだけど・・・」

レパルスは、はて、と首をかしげる。

「この前、私に指揮官とノーフォークのことを教えてくれた時は『何をしてるかわからない、興味はない』みたいなこと言ってなかったっけ? 今のじゃまるで、2人が何をしてるのか知ってるような・・・」

「――!」

ハムマンはレパルスの言葉に対してケモミミをビクツと振るわせ、慌てて立ち上がりテーブルに身を乗り出した。

「ハムマンはアイツが練習って言ってどうせ遊んでるだけだと思って言っただけで! 何をしてるのか気になったとかそんなことはないんだから!!」

「あー・・・はいはい」

「な、なんなのだその言い方は!」

「わかった! わかったから落ち着きなよ」

レパルスがハムマンを落ち着かせると、彼女は元のように椅子に腰掛け、腕組みをする。

「からかってごめんね! このとーり!!」

レパルスは両手を合わせて頭を下げる。ハムマンはそんなレパルスの姿を見て「ふん!」とそっぽを向いてしまうが、どうやら許してくれるようだ。

「で、私もその特訓? ってやつを見てみたいんだけど、ハムマンも一緒に行かない?」

「ハムマンは別に興味ないし...」

「んー困ったなあ。私、指揮官達がどこで特訓してるのかわからないし、誰かに付いてきてもらえると助かるんだけど...」

レパルスはわざとらしく顎に手をあて、横目でチラッとハムマンを見る。

「わ、わかったわよ! ハムマンも一緒に付いて行くぞ」

レパルスは心の中で「やれやれ...」と呟く。ハムマンは自分の気持ちを素直に表現することが苦手だが、こちらがそれを理解してあげれば彼女ともうまくやっていける。レパルスは今それをやってみせたのだ。

「ありがとーハムマン! よーし、そうと決まれば Let's go
o!」

「ちよ、ハムマンを置いて行くなー!!」

「ーっふっ!」

助走をつけたクレセントから、一直線にボールが飛んでいく。ボールはそのまま...

「ーっ」

バシンと音をたてて、ノーフォークの両腕の中に吸い込まれた。

「ノーフォークさん！ ジャベリン、投げますよー！」

「はい、お願いします！」

ジャベリンもまた、たたつと数歩助走をつけて、ボールを投げる。
「ーっ」バシン

指揮官は腰を降ろして、3人を眺めている。クレセントとジャベリンが訓練に参加したばかりの頃は指揮官も一緒になってボールを投げていたのだがー残念なことに、指揮官の力は艀装を展開した駆逐艦には及ばなかった。

「ーーー」

指揮官とて、大の大人である。運動神経や体格は決して悪くなく、ボールを勢いよく投げるコツもやっとなんできたところだったが、その努力はクレセントとジャベリンの登場であっさり水の泡になった。艀装を展開した2人はさながらバレーボールマシンのようであり、汗一つかくことなくズバンズバンと勢いの良いボールを投げ込んでく。指揮官も2人に混ざってボールを投げてはいるが、足手まとい……とは言わないまでも、他の2人の少女に遅れをとっているのは誰の目から見ても明らかである。ーーーのちに指揮官は、この出来事が割と心に刺さったことをぼろつと吐露する。

「ふむ……」

訓練が始まった頃のノーフォークはボールを怖がつてキャッチできないことが多かったが、今では飛んでくるボールに合わせて体を動かし、難なく体の中心で受け止めている。流石は重巡洋艦と言ったところだろうか。ノーフォークは砲撃や魚雷の扱いに苦手意識を持っているがその耐久性には目を見張るものがあり、それは、バレーボール選手のスパイク並の速度で飛んでくるボールを臆することなく受け止めているその姿からも、ひしひしと伝わってくる。しかし、肝心のシールドが出現する様子は一向にない。

（ボールの威力が足りないから、『攻撃を受けた』と認識できないのか……？ それとも、ボールに慣れてしまったから防衛本能が働かないのだろうか……）

指揮官は一人、そう思索する。あれかこれかと考えを巡らせるが、

そもそも、ノーフォークのスキルだけでなく艦船少女の『スキル』には判明していないことが多い。結局、こうして考えて分かったことは『考えていてもしようがない』ということだけだった。

「よし、十分に休憩できた。私もまた入ろう」

指揮官がそう言つて腰を上げると、体育館の入口の方から足音が聞こえてくる。

「やつほー指揮官ー！」

「……」

「ああ、レパルスとハムマンか………む？」

現れたのはレパルスとハムマンだった。指揮官は2人がこの場に足を運ぶことに対してはなんら不思議ではなかったが、問題なのはレパルスの格好だった。

「レパルス、何故艦装を……」

「何をしてるのかなーと思つてたら、みんなドッジボールをやつてたんだね！ さつき一度こっちに来ただけど、みんな艦装を付けてたから私も付けてきたの！ 私に内緒でこんな面白いことやつてたなんてねー。私もやつていい？ なんか体を動かしたい気分なんだよねー」

「ああ、それは構わないが、これは……」

『ノーフォークの為にやつていること』と言う前に、レパルスは足元に転がっていたボールをひよいと拾い上げ、指揮官の方を向いたではないか。

「あ、レパルスさんとハムマンちゃんだ！ おうい！」

「レパルスさん……？ なんで艦装を……」

既に訓練を行つていた3人も、2人の来訪者に気がついたようだが、レパルスは声をかけられたことに気付いていない様子である。

「あつちは1対2でやつてるようだし、こっちも2人で行くよー！」

ね、ハムマン」

「ハ、ハムマンはやらないー！」

「ちえつ、なーんだ。まあ、1対1も燃えるからいいんだけどね！ 思いつきりいくよー!!」

「おい、私達は遊びでやっている訳では」

瞬間、氷のような悪寒が電流のように速かに指揮官の全身を走った。艤装を展開した駆逐艦の放つボールがバレーボール選手のスパイク並なら、そこから軽巡洋艦、重巡洋艦を飛ばして巡洋戦艦クラスになると、一体どれ程の剛速球が飛んでくるのか。目で見てから回避することなど到底不可能だろう。ただの人間がその一撃をもらってしまえば、無事では済まないのは必至。この場にいるレパルス以外の全員が、指揮官に緊急事態が迫っていることを察知した。だが、無情にもレパルスから繰り出されようとしている悪魔のような一撃は止まる気配がない。

「狙って〜…」

「レパルス、ま」

「しきか」

「ちよっ」

投擲体勢に入ったレパルスとジャベリン、クレセントは数メートル以上離れている。2人は驚きのあまり、レパルスと指揮官をただ見ていることしかできず、そのままボールは…

「ポンー！」

「だめえッ!!」

指揮官はレパルスの投擲体制を見た瞬間、間に合ったとしても間に合わなかったとしても無事では済まないと分かっていたが、せめて頭は守ろうと防御体勢をとろうとした。

「oooooooooo!!」

どこに飛んでくる。頭か、腹か、足か。どこにせよ、コンマ数秒先にやってくる激痛に耐えなければならぬ。指揮官は歯を食いしばって最悪の瞬間に立ち向かおうとoooooooooo

「ooooooooooooooooooんっ？」

(痛みが来ない……………?)

「あ、あれ……………?」

「うそ……………」

ジャベリンとクレセントは、広がっているであろう最悪の事態に覚悟を決めて目を開く。しかし、そこには――

「はあ、はあ……………」

指揮官の前にノーフォークが立ち塞がり、彼女の目の前には青く光る一枚の盾が広がっていた。

「……………わーお」

レパルスの本気のボールにただの人間の指揮官が当たってしまったら…………… 考えるより先に、ノーフォークは飛び出していた。艦船少女であり重巡洋艦である自分なら、レパルスのボールに当たったとしても怪我はしないだろう。だが、足を広げ、手を伸ばし、艀装を大きく広げたとして、絶対に指揮官に当たらないと言えるだろうか。おそらく指揮官の肩にぶつかっただけでも、骨が外れかねない…………… こんな時、自分が指揮官を守る『盾』になれたなら……………

「……………あれ?」

「ノーフォーク……………それは……………」
ノーフォークは指揮官の声を聞くと、急いで振り向いて彼に駆け寄る。

「指揮官! 大丈夫ですか!? どこも痛くないですか!?!」

「あ、ああ。私なら大丈夫だ、どこにも怪我は無いよ。だが、それは……………」

指揮官はノーフォークの背後、ボールが飛んできていたであろう方向に一枚の青い盾のようなものが浮かび上がっていることを確認した。

「ノーフォークさん! それってノーフォークさんのシールドですよね!!」

ジャベリンはそう言ってその場で元気よく跳ねる。いつも海上で、

彼女のとなりで『それ』を見ているジャベリンだからこそ、それが本物のシールドであることをすぐに理解した。予想外の事態に全員が困惑しているが、その予想外の事態を引き起こした張本人が一番困惑していた。

「これ、私のシールド？ でも、なんで……」

ノーフォークが状況を飲み込めていないのは当然のことだった。なぜなら……

「私には当たってないのに……」

そう。『彼女にボールは当たっていない』のだ。本来、彼女のスキルである『正面装甲』は攻撃を受けた時に発動するのだが、今回の場合、彼女は攻撃どころか、衝撃すらも受けていない。

「……ノーフォーク」

「……え？ は、はい！」

ノーフォークが俯いて困惑していると、指揮官から名前を呼ばれ、びっくりして顔を上げる。

「ありがとう。君のおかげで助かった」

「あ……」

指揮官はノーフォークの頭にぽんと手を置いた後、やさしく前髪を撫でた。ノーフォークはその手を取り、大切そうに頬を擦り付ける。

「うう、指揮官……しきかん……」

この指揮官、既にお分かりだろうかかなりの堅物である。たまにジョークを挟んだりすることはあるが、常に艦船少女本位で行動し、彼女達には決して鼻の下を伸ばさない。だが、今回だけは『私の手はハンカチではないぞ』などという無粋なことは言わず、黙って彼女の涙を拭いていた。

メンタルキューブ、艦船少女、スキル。これらにはまだまだわからないこと、不思議なことがたくさんある。それは時を選ばず、場所を選ばず、突然やってくるものだ。それがたまたまこの時間、この場所というだけ。……ただ今回、防衛本能などではなく、『大切

な人を守りたい』という強い気持ちスが小さな奇跡キを起こしたのかもしれない。

「あーっ…これ、やっちゃったカンジ…？」
やっちゃった当人には後日、それなりの罰ルが下されたんだとき。